

Title	秋田光彦著『葬式をしない寺大阪・應典院の挑戦』
Author(s)	白波瀬, 達也
Citation	宗教と社会貢献. 2011, 1(2), p. 115-121
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/15149
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

書評

秋田光彦著

『葬式をしない寺 大阪・應典院の挑戦』

新潮社、2011年2月20日、新潮新書、207頁、735円

白波瀬 達也*

1. 本書の位置づけと著者の略歴

都市化や個人化のたえざる進行によって、仏教との関わりを問い直す動きが昨今、顕著になっている。このことは仏教関連の出版の隆盛からも容易にうかがえよう⁽¹⁾。本書の舞台となる應典院は、今日の仏教関連の出版ブームの草分けの著書、上田紀行『がんばれ仏教 お寺ルネサンスの時代』で取り上げられた寺院としても知られる。『葬式をしない寺』というタイトルは、昨年、大きな反響を呼んだ島田裕巳の著書『葬式は、要らない』を少なからず意識したものであるといえるだろう。近年、「葬式仏教」を支える家族が縮小・変容する中で伝統仏教は未曾有の危機に瀕しているといわれる。そのような中、葬式に依存しない寺のあり方を模索しているのが浄土宗大蓮寺の塔頭寺院、應典院である。

應典院の代表を務めるのが本書の著者、秋田光彦（1955年大阪生まれ）である。秋田は明治大学文学部演劇学科卒業後、情報誌の出版で知られる「ぴあ」に入社し、主に映画祭の企画・宣伝を担当。退社後、映画制作会社を設立し、プロデューサー兼脚本家として「狂い咲きサンダーロード」「アイコ16歳」などを発表するなど、異色の経歴をもつ。1997年に大蓮寺創建450年の記念事業として劇場型寺院、應典院を再建。以後10数年間にわたって、市民、コミュニティ、地域資源のあり方を具体的に提案・実践し、市民活動や若者の芸術活動を支援してきた。2002年より大蓮寺住職となり、2009年度からは大蓮寺・應典院に隣接するパドマ幼稚園園長に就任。また、相愛大学人文学部客員教授としても活躍している。

* 大阪市立大学都市研究プラザ GCOE 特別研究員。tawaki79@hotmail.com

2. 本書の構成と内容

本書は以下の章で構成されている。

はじめに

第一章 葬式をしない寺

第二章 寺は死んでいるのか

第三章 呼吸する寺

第四章 日本でいちばん若者が集まる寺

第五章 寺こそ、生死をつなぐ拠点

第六章 寺の明日、仏教の未来

「はじめに」から「第二章」までは、主に應典院再建までのプロセスが、第三章と第四章では應典院再建後の実践が描かれる。第五章と第六章で個人化が進行した現代社会における仏教の課題が描かれ、本書は締めくくられる。以下、本書に倣いながら、概要を示す。

「大阪を代表する寺町、天王寺区下寺町の入り口にそびえる、ドーム型のコンクリート寺院」(P.8)である應典院は、「檀家不在の寺として廃寺同然であったものを、1997年に建物ごと新しく再建」(P.8)したものである。應典院は、有名な繁華街ミナミから、徒歩10分のところにあり、非常にアクセス条件が良い。コンクリート打ちっぱなしの鉄骨2階建ての建築は伝統的な寺院のイメージを覆すものである。2階には本堂があり、そこは音響・照明施設を備えた劇場型の円形ホールとなっている。また、1階にはセミナー・ルームやオープン・ギャラリーが付設されている。このように寺院には似つかわしくない機能や設備があり、手軽に利用できることから、表現活動の場を求める若者たちが年間3万人集まる。そのため應典院は「日本でいちばん若者が集まる寺」として知られる。

1980年代後半から1990年代、オウム真理教や幸福の科学の台頭を目の前にし、日本の宗教界が百年に一度の大きな転機にあると考えた秋田は、広告制作会社の代表、企業の研究所スタッフ、プランナー、まちづくりを研究する大学の教員と1994年に「應典院プロジェクト」を立ち上げた。そこ

では伝統や制度の縛りから逃れて、都市の中の聖なる空間として、いかに『開かれたお寺』を構築するべきか」(P.29)が議論された結果、「葬式をしない寺」として應典院はその存在価値を社会に問うことになった。「お寺は葬式専門の施設である、死んでから行くところである」という世間の思い込みを取り払って、まったく別の役割を提示して、生きる者どうしの参加を促していこうとする点が應典院の基本的なスタンスとなった。「組織や体制にぶら下がるのではなく、一人ひとりがかけがえのない存在としてどう生きるのか」(P.39)という問いに応答しうる新たな「場」が求められていると強く感じていた秋田は、アメリカの経営学者、P.F.ドラッカーの「日本の寺は非営利組織の原点だ」という指摘に刺激を受け、寺のもつ公益性を深く再考するに至った。

<今日の應典院の生み出す契機となった出来事>

「應典院プロジェクト」をスタートした頃、秋田は阪神淡路大震災を経験した。秋田は震災の救援活動に積極的に参画し、アーユス仏教国際協力ネットワークの関西支部長の役に就いた。被災地において、犠牲者の供養は僧侶の独壇場であったが、それ以降の生活支援、自立支援において教義や読経はほとんど役に立たなかった。また、仏教の言葉に救いを求めた人は、非常に少なかった。これらは「救済のプロ」と自負する秋田のアイデンティティを大きく揺さぶる経験となった。さらに、被災地では、「所属」が通用せず、「求められたのは宗派でも寺の名前でもなく、僧侶という自分にとっての極点の立場、それだけ」(P.56)であった。秋田は被災地で体験した、因習や制度を超え、市民と協働する仏教＝「関係性としての仏教」を一時的なことではなく、普段の地域生活の中で試すことはできないだろうかと模索するようになった。

同時期、秋田はエンゲイジド・ブuddiズム（社会参加仏教）の提唱者として知られるベトナム人僧ティク・ナット・ハンとタイの開発僧として知られるナン・スットシーローとの出会いうことになり、「関係性としての仏教」の方向性をさらに模索することとなった。

<開かれたお寺としての應典院>

應典院再建当初は、「お葬式をしないお寺」「日本初のNPO型寺院」と新

聞紙上をにぎわせたが、実際はほとんど誰も足を踏み入れることがなかった。期待と不安が入り交じる日々の中で應典院にやってきたのは、「文化人やアーティストではなく、鬱病やコミュニケーション障害を抱えた人たち」(P.80)であった。秋田は不慣れな対応の連続の中で、バーンアウトしそうになるが、「誰も拒まない。拘束しない。でも求められれば住職が話につきあう」(P.81) 経験を通じて、應典院としてのコミュニケーション力を獲得していった。

近年、「開かれたお寺」というフレーズを仏教界が好んで使うが、秋田はその現状の多くが単純な「寺の場所貸し」にとどまっていると指摘する。秋田は「施設や設備の充実より、まず住職はじめ寺の人間がいかにかい頭を『開く』か、が問われる」(P.84) とし、「内に閉ざさず、外にポジションを求めることで、寺は自ずと開いて」(P.84) いくと述べる。ただし、「開かれた状態」というのは、寺が都合よくコントロールできるものではなく、「絶えず外との緊張関係に自らを晒すこと」(P.85) だと秋田は注意を促す。

<個人の生き方を支える仏教>

元来、仏教は徹底した個人観に基づいているが、日本の仏教の現実には「個」を置き去りにし、「社会の構造が大きく変容しても、組織から切り離された個人の呻きに、仏教はほとんど応えられていな」(P.92) い。そこで秋田は生きる意味を探し始めた「個」に対し、新たな関係性を指し示す実践に着手するようになった。中でも際立ったものがアマチュア演劇に携わる若者たちとの関わりである。現在、應典院に集まる若者の7割以上が演劇関係であるが、秋田は決して應典院を演劇専門のスペースにはしなかった。実際に應典院では演劇の公演の最中に、別の部屋でNPOのワークショップや子ども向けの箱庭療法の教室が、ギャラリーでは絵画展が同時に開催されていたりする。このような「異質性と多様性」(P.99) が應典院にしかない「場」の力であると秋田は考える。これらの実践の積み重ねの中で、秋田は「寺を開く」営みを、生き方を迷う人々に「もうひとつの生き方の座標軸を指し示すこと」(P.117) と捉え直すようになり、「僧侶とは、彼らの苦に寄り添う、『共苦』の伴奏者ではないか」(P.117) と認識するようになった。

<葬送の変容と仏教>

近年、日本は少子化や婚姻形態の多様化などによって「供養の継承困難」という深刻な問題を経験し、「伝統とされてきた葬送は大きな見直しを余儀なくされている」(P.146)。このことは日本の寺院全体を覆う問題であると同時に、人々が個人レベルで生死に関与しはじめる契機になったと秋田は分析する。「散骨・自然葬」「永代供養墓」「直葬」など、この20年ぐらいの短い期間に登場した新卒の葬送スタイルは、民間業者やNPOの主導のもと広がりを見せている。これら「葬送の自由化」が進むにつれて、既成仏教に対する疑義が公然と浮上し、長い間、踏襲されてきた仏教の伝統主義に個人が異議を申し立て始めた。秋田は「葬式仏教の再生には、葬式の一点によりかかるのではなく、お寺を中心とした生老病死のコミュニティを創造することが急務だ」と論じている。

<仏教のこれから>

最終章である第六章では應典院以外でも、寺院の刷新がおこなわれていることが紹介される。とりわけインターネットやメールを使いこなす1980年代生まれの若い世代は教団や寺社会を軽々と飛び越えて、異能を発揮する個性的な人材がいるという。また、近年、宗派や本山の一員としての布教活動とは別に、地域社会の一員としてさまざまな実践をおこなう寺院が台頭しているという。これらの多くはNPOとして活動を展開しているため、教団内部では反発の声もある。しかし、秋田はお寺がNPO事業をすることによって「外の社会に向き直り、自らを相対化していく」(P.181)ことができると指摘する。

最後に本書は寺院のNPO事業は基本的に布教と切り離されたものとしておこなわれるため「僧侶の自明性」が問われると論じている。「布教の成果」を求めると、どうしても「相手を変えよう」とするが、「関係性としての仏教」を目指すならば、「自らの『信』を礎に、さまざまなかかわりを通して僧侶自らが変わる柔軟性と、他者に寄り添う親和性」(P.186)を備えなくてはならないと秋田は論じる。家族や地域社会の危機が叫ばれるほど、仏教の役割は格段に増している。現代が抱える「苦」と向き合い、たくましい個人の主体性を育て、それを縁のネットワークに編み上げることがこの時代に要請される寺院の最大の使命だという言葉で本書は締めくくられる。

3. 本書に対するコメント

本書は秋田が「一人称」の立場で應典院の足跡を綴っているが、秋田自身がすぐれて「ソーシャル」な人物であることから、結果としてその記述は単なる個人史ではなく、「社会史」として読むことができ、興味深い。また、本書は應典院という類まれな寺院活動にもっぱらフォーカスを当てているが、そのことが逆説的に近年の仏教の状況を照射させることに成功している。すなわち、「開かれたお寺」である應典院の実践が詳らかに語られれば語られるだけ、そのようにはならない／なれない無数の寺院の存在が浮き彫りになるのだ。

さて、評者は應典院のもつヒト（秋田と秋田をとりまく人的ネットワーク）・カネ（現代的な建築様式の寺院を再建する経済力）・モノ（利用価値の高い空間資源、アクセスの良い立地）のいずれもが比較的好条件であったことによって、今日の発展が可能になったと考えている。中でも本書を通じて評者が改めて痛感したのがヒトの重要性である。應典院の場合、秋田の優れた社会性、感受性は決して寺院の中で養われたものではない。むしろ、秋田が青年期に経験した映画づくりの現場や、應典院を再建する前に経験した震災ボランティアの現場で養われたものだろう。應典院の前史となるこれらの現場で秋田は中核的な役割を担い、社会と向き合う作法を身につけていった。僧侶の限界を感じながら、僧侶であることを辞さず「社会」に積極的に対峙してきたことで秋田は應典院を産み出した。それは「仏教とは何か」「僧侶とは何者か」という深い内省と苦闘の末の難産であったと考えられる。

本書で紹介された「開かれたお寺」「関係性としての仏教」は他の寺院でも実践可能なものなのだろうか。いかなる条件で寺院が他者に開かれたものになるのかを明示していくことが今後の研究課題として重要であろう。應典院のようなメディア露出の高い寺院だけでなく、いまだ知られざる「第2、第3の應典院」を分析の俎上にのせることが今後の仏教の社会参加・社会活動の現代的展開を客観的に把握するために必要になってこよう。

註

- (1) 本書の出版媒体である「新潮新書」だけを見ても、2010年以降、村井幸三『お坊さんが隠すお寺の話』、ネルケ無方『迷える者の禅修行ードイツ人住職がみた日本仏教』、みうらじゅん『マイ仏教』が出版されている。

参考文献

上田紀行 2004 『がんばれ仏教 お寺ルネサンスの時代』 日本放送出版協会。

島田裕巳 2010 『葬式は、要らない』 幻冬社。